

# 牧村史陽氏旧蔵写真

関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センターが所蔵する牧村史陽氏旧蔵写真は、『大阪ことば事典』・『難波大阪』などの著作で知られる郷土史家、牧村史陽氏が撮影した写真史料である。

写真には、今はもう見るできない大阪の風景が写されており、近代大阪の文化遺産を研究する上で、貴重な史料であるといえる。牧村史陽氏旧蔵写真の中には、紙焼写真のほかに、大量のガラス乾板も含まれていた。今回の企画展では、これらの写真から 35 点を選び展示する。

また牧村史陽氏は、『大阪人物事典』に紹介されるように、無類のコレクターでもあった。当センター所蔵の史料にも、写真以外のコレクションが多数含まれており、これらもあわせて展示する。

## 1. 町人学者・牧村史陽

牧村史陽 (1898 ~ 1979) は、明治 31 年 (1898)、大阪船場の木綿問屋に生まれた。大阪大倉商業学校 (現・関西大倉高校) を卒業後、独力で大阪の郷土史調査を積み重ねた。「郷土史は足で書け」を持論とし、大阪のありとあらゆる場所へおもむいては、調査地の光景を写真に収めて歩いた。晩年の大作『難波大阪』の著述においても、その付録篇の中で、「自慢ではないが、どこにどんなものがあるかはほとんど知りつくしているつもりである」と自負しつつも、新しく稿を起こすとすると、改めて現地を確かめてみなければペンを持つ気になれない、徹底した実地主義を貫いている。

大阪船場に生まれた浪華っ子らしく大阪弁に深い愛着を抱き、「大阪ことばの会」を結成して昭和 30 年 (1955) に『大阪方言事典』を刊行した。しかし、五千語以上を収録したこの書物でさえも、おそるべき熱意の人、牧村史陽にとってははまだものならず、その後さらに二十数年間にわたって増補・改訂を加え続け、昭和 54 年に『大阪ことば事典』として再刊されたのをもちょうやく、「いちおうの纏まりがついたものと考えている」(『大阪ことば事典』はしがき) と得心してみせた。

生涯現役であることを願い、百歳をこえて 21 世紀までも研究を続けていきたいと語った牧村史陽であったが、昭和 54 年 4 月、81 歳で没した。昭和 53 年に大阪文化賞を受賞。

### 校訂跡のある『大阪方言事典』

『大阪ことば事典』(講談社) は、牧村史陽の最も著名な著書の一つである。『大阪ことば事典』の刊行は昭和 54 (1979) 年だが、昭和 30 年には、その前身である『大阪方言事典』(杉本書店) が刊行されていた。『大阪ことば事典』「はしがき」には、『大阪方言事典』刊行後に書き留めた新原稿が、かなりの量に達したので、新たに『大阪ことば事典』を刊行したことが記されている。

当センターが所蔵する牧村史陽氏旧蔵品の中に、使い込まれて擦り切れそうな『大阪方言事典』がある。牧村史陽の手による書き込みや、メモの貼付けがいたるところにあり、刊行後も 20 数年をかけて校訂を加え続けた痕跡をうかがうことができる。



校訂跡のある『大阪方言事典』



郷土史研究会誌『佳陽』

### 郷土史研究会誌『佳陽』

牧村史陽は、『佳陽会』という郷土史会を主宰していた。その機関誌として発行されていたのが、『佳陽』である。



『スクラップ大阪』

### 『スクラップ大阪』

『スクラップ大阪』は、謄写版で100部限定という、ごく小規模な雑誌である。内容は、大阪に関する新聞記事を収集して整理したもので、牧村史陽が主宰した「大阪ことばの会」の会報である『大阪辯』の別冊という位置づけで刊行された。

売れない本だということがこれだけ、はっきりわかっているものも少ないだろう。商売にならないから誰も手をつけない。しかし、何とかしてやって見たい。大阪のために、現代の大阪の記録を残すために—

(『スクラップ大阪』第一集より)

### 商品券、入浴券など

牧村史陽が旧蔵していた品々の中には、マッチ箱のレットルの他に、まさに「こんなもの何の役に立つか」(『大阪人物事典』)と思わせるものもある。「2銭」の商品券は、戦前のものと考えられるが、第二次世界大戦後の新円切替によって、利用不可能になったはずである。「大阪市共通」と書かれた入浴券は、期限が明治33年(1900)6月で切れており、明治31年生まれの牧村史陽が、なぜこんなものを手元に置いていたのか。七曜表は昭和16年(1941)のもの、昭和26年のものであるが、保存状態が極めてよく、実際に使用した形跡もない。



商品券、入浴券など



マッチ箱のレツテル

### マッチ箱のレツテル

当センターが所蔵する史料の中には、牧村史陽撮影の写真だけでなく、牧村が収集した雑多な品も含まれている。三善貞司編『大阪人物事典』（清文堂出版）に紹介される「マッチ箱のレツテル」もあり、その点数は63点にのぼる。マッチ箱のレツテルはいずれも、単に市販されているものではなく、店の宣伝用やタバコの景品として配布されたもので、丹念に見れば一点一点、当時の社会の世相を読みとることができる。

三善貞司は、牧村史陽を次のように紹介している。

彼はまた無類のコレクターであった。それもしょうもないものを集めるマニアだ。乗物の切符、汽車弁などの包紙、箸入れ袋、マッチのレツテル、こんなもの何の役に立つかと眉をひそめるガラクタの山が書齋を占めている。無論古い大阪の写真・史蹟資料・新聞雑誌のスクラップ、取材メモ等は膨大なもので、しかもそれらが綺麗に整理され、どこそこの古墓といえは手品のような手つきでたちまち引き出してくる。

（『大阪人物辞典』より）

## 2. 「郷土史は足で書け」 — 『難波大阪』とその資料写真—

牧村史陽の持論である「郷土史は足で書け」を最もよく体現した著作が、『難波大阪』である。『難波大阪』が昭和50年(1975)に刊行されたとき、牧村史陽は77歳であった。しかし『難波大阪』付録篇の中で牧村は、衰えることを知らぬ熱意を語る。「だが、ほんとうのところ、これでは私はまだ不満足なのだ。もっと書き加えたい。(中略)しかしそんなことまで書いておれば、この二倍の分量があってもおさまらない」(『難波大阪』付録篇)。当センター所蔵の牧村史陽氏旧蔵写真には、『難波大阪』掲載写真の原版が含まれている。



1 高津宮 (撮影年不明)

### 1 高津宮 (大阪市中央区高津)

高津宮は、もと大阪城付近にあったものが、文禄3年(1594)に現在地(大阪市中央区高津)に移転したとされる。高層建築のない時代には、市中随一の展望所だった。



2 難波宮発掘 (昭和36年10月13日撮影)



3 難波宮発掘 (昭和44年9月6日撮影)

### 2・3 難波宮発掘 (大阪市中央区法円坂)

写真2は天平16年(744)に都とされた、難波宮跡の発掘風景。写真3は、出土した瓦の写真である。



4 花外楼（撮影年不明）



5 花外楼（撮影年不明）

#### 4・5 花外楼（大阪市中央区北浜）

写真4は大阪市中央区北浜にある老舗料亭「花外楼」の写真。扁額（写真5）は木戸孝允の揮毫である。



6 食野家四十八蔵（昭和38年3月13日撮影）

#### 6 食野家四十八蔵（泉佐野市元町）

泉佐野には、江戸時代に食野家<sup>めしの</sup>という廻船問屋があり、大きな勢力を持っていた。泉佐野市元町には、現在も廻船問屋食野家の蔵がわずかに残っている。



7 帝国座の跡（昭和 25 年撮影）

### 7 帝国座の跡（大阪市中央区北浜）

川上音二郎が建てた帝国座の跡。写真には「大阪カトリック教会」の看板がみられるが、現在は「帝国座跡」の石碑が立つのみである。



8 大正橋（昭和 42 年 9 月 9 日撮影）

### 8 大正橋

（大正区三軒屋東～浪速区木津川）

大正橋は、千日前通の大正区三軒屋東と浪速区木津川との間に架かる橋である。大正 4 年（1915）に、市電の開通にともなって建設された。大正区の命名は、この橋に由来する。



9 新清水玉出の滝（撮影年不明）

### 9 新清水玉出の滝（大阪市天王寺区伶人町）

大阪市天王寺区伶人町の清水寺には、市内唯一の滝「玉出の滝」がある。滝に打たれて修行する光景は、現在でも時折見られる。



10 口縄坂（昭和36年10月16日撮影）

**10 口縄坂（大阪市天王寺区下寺町）**

「天王寺七坂」の一つ、口縄坂の写真。坂の名は、見下ろした様子が蛇に似ているところから出たものと言われる。



11 杭全神社（撮影年不明）

**11 杭全神社（大阪市平野区平野宮町）**

大阪市平野区にある、杭全神社の風景。杭全神社は、坂上田村磨の子、広野麿が杭全荘を荘園として賜ってこの地に居を構え、その子当道が貞観4年（862）に氏神として創建したと伝えられる。



12 四天王寺・安産の石橋（撮影年不明）

**12 四天王寺・安産の石橋**

（大阪市天王寺区四天王寺）

現在、四天王寺本坊奥庭に石棺の蓋が置かれている。もとは亀井水の南の小溝に橋として架けられており、この橋を渡ると安産になると伝えられていた。

### 3. 牧村史陽氏旧蔵写真の中に残る大阪

当センター所蔵の牧村史陽氏旧蔵写真には、今はもう見るできない「大阪の風景」が残されている。ここでは、膨大な量の写真から、24点を選んで展示している。



『佳陽』84号

もし私が死んだら、これらのコレクションをどう処分したらよいかと時折り考えてみることもあるが、それについては去年、大島市長にも話したことがあり、市の図書館あたりでも引き受けてくれるとええのやけど、それにしても吏員の一人がそのためかかりづめにかかってくれねばなるまい。

(史陽自伝その一)

(『佳陽』84号、昭和53年12月より)



13 垂水神社付近 (昭和34年10月25日撮影)

#### 13 垂水神社付近 (吹田市垂水町)

#### 14 千里山付近 (吹田市千里山西)

ともに関西大学付近の風景。

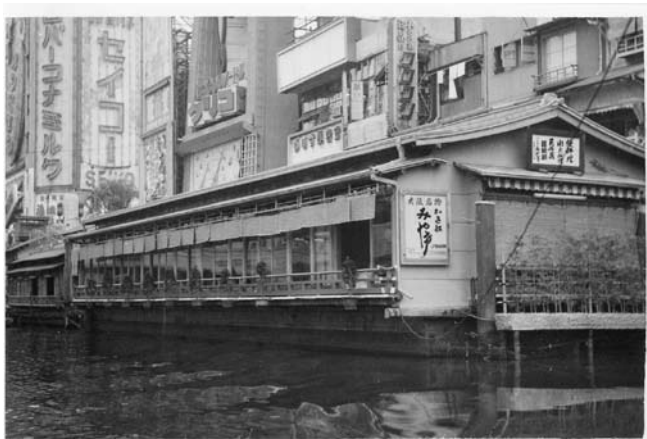
写真13は垂水神社の参道である。鳥居からのびる参道約100メートルの両側には住宅が建ち並んでいる。垂水神社は『延喜式』神名帳に記載される式内社であり、かつては境内に摂津第一の名水とされた滝が流れ落ちていた。

写真14は、千里山駅から西に坂を登った場所にある「千里山第1噴水」である。千里山住宅地は、大正9年(1920)の大阪住宅経営株式会社の設立とともに始まった。この噴水と周囲の広場は、千里山住宅地の開発当初から中心地として設計されていた。



14 千里山付近 (昭和38年10月20日撮影)





15 戎橋(昭和31年9月13日撮影)



16 戎橋(昭和31年9月14日撮影)



17 戎橋(昭和36年12月8日撮影)

#### 15・16・17 戎橋(大阪市中央区道頓堀)

大阪の庶民的なにぎわいをみせる、戎橋の風景。「かに道楽」道頓堀店が昭和37年(1962)に開店する以前の光景である。現在、「かに道楽」がある位置にみられる雪印のネオン看板は、現在はグリコのネオンの隣に移動している。写真15・16の「クロバーコナミルク」は、昭和33年に雪印に合併されたクロバー乳業のもの。

川べりには牡蠣船が営業している。道頓堀や土佐堀川、堂島川などでの牡蠣船は、かつて大阪名物の一つに数えられていたが、昭和40年に道頓堀川の防波堤工事が実施されたため、それ以降、道頓堀川から牡蠣船の風景は姿を消した。



18 大阪球場（昭和29年6月3日撮影）



19 大阪球場（昭和29年6月3日撮影）



20 大阪球場（昭和29年6月3日撮影）

### 18・19・20 大阪球場

#### （大阪市中央区難波）

大阪球場前の風景。大阪球場は、昭和25年(1950)にプロ野球の南海ホークス(現ソフトバンクホークス)のホームグラウンドとして建設された。写真の昭和29年当時は、ほかに近鉄パルス、大洋松竹ロビンス(現横浜ベイスターズ)と、同時に3球団のホームグラウンドでもあった。

写真20では、大阪球場の手前の難波新川が埋め立てられている。江戸時代、大阪球場のあった場所には、幕府の米蔵である難波御蔵が建っていた。難波新川は、難波御蔵へ米を運ぶために、享保18年(1733)に開鑿された堀川である。

現在は大阪球場があった場所に「なんばパークス」が建っている。



21 谷四（昭和44年9月9日撮影）



22 谷四（昭和44年9月9日撮影）

### 21・22 谷四（大阪市中央区谷町）

モータリゼーションの進展にともない、昭和40年代から、大阪の街に阪神高速道路が建設されはじめた。街中を走る高架道路は、大阪の風景を大きく変えることになった。

写真21・22は谷町4丁目の風景。阪神高速13号東大阪線は、昭和44年（1969）に信濃橋から法円坂までの区間が開通した。写真には、建設工事中の高架が見える。

### 23 難波橋

（大阪市中央区北浜～北区西天満）

昭和5年（1930）に御堂筋の拡幅工事が行われるまで、大阪を代表する主要道路は堺筋であった。難波橋は、土佐堀川・中之島公園・堂島川にまたがっている橋で、北詰は西天満1丁目、中間は中之島1丁目、南詰は北浜2丁目となっており、橋上を堺筋が通る。

橋詰の4か所にライオン像が設置されたことから、「ライオン橋」の愛称で市民に親しまれている。写真では難波橋の上を市電が通るが、大阪市電は昭和44年には廃止された。



23 難波橋（撮影年不明）



24 東横堀川まがり（昭和38年10月3日撮影）



25 東横堀川まがり（昭和27年5月29日撮影）

#### 24・25 東横堀川まがり

（大阪市中央区本町）

写真24・25は東横堀川の風景。東横堀川は本町橋と農人橋の間で「まがり」と通称されるS字カーブを描いて流れる。現在は、東横堀川の上には阪神高速道路1号環状線が通っており、この写真ほど東横堀川を見通すことは難しい。



26 一心寺（昭和32年5月19日撮影）

#### 26 一心寺（大阪市天王寺区逢阪）

骨仏で有名な一心寺の納骨堂落慶の風景。一心寺には、現代建築のモダンな山門がそびえ立つ一方で、宝珠塔形総檜造りの伝統的な納骨堂がたたずむ。この納骨堂は、昭和32年（1957）に再建されたものである。写真は再建されたばかりの納骨堂の落慶法要で、写真中の看板に「御骨佛開眼 納骨堂落慶 大法会」の文字が見える。



27 新町通 (昭和 25 年頃撮影)



28 新町吉田屋 (昭和 29 年 7 月 17 日撮影)



29 関西電力春日出第 2 発電所  
(昭和 33 年 10 月 19 日撮影)

## 27 新町通

## 28 新町吉田屋 (大阪市西区新町)

新町は、江戸時代に公許された大坂唯一の遊廓であった。その豪華さは、井原西鶴の『好色一代男』に「京島原の女郎に、江戸吉原の張りを持たせ、長崎丸山の衣装を着せ、大坂新町の揚屋で遊びたし」とうたわれるほどであったが、第二次世界大戦の戦災でほぼすべてが焼失した。

写真 27 は、戦後間もない頃の新町通だが、すでに往時の華やぎはない。江戸時代には、近松門左衛門の『夕霧阿波鳴渡』で有名な吉田屋という揚屋があったが、これも戦災で焼失した。写真 28 の「吉田屋」は戦後に規模を縮小して再築したものか。



30 関西電力春日出第2発電所（昭和31年9月13日撮影）



31 関西電力春日出第2発電所（昭和31年9月13日撮影）



32 関西電力春日出第2発電所（撮影年不明）

**29～32 関西電力春日出第2発電所  
（大阪市此花区北安治川通）**

8本の煙突が空を圧するこの建物は、関西電力の春日出第2発電所である。春日出第2発電所は大正11年（1922）に建設された。4本の煙突が2列に配置され、見る位置によって、さまざまな本数に見え、「八本煙突」と呼ばれて親しまれていた。当時は石炭を燃料とした火力発電であったが、大阪の人口増加にともなって発電能力を強化するために重油による火力発電に切り替える必要があり、「八本煙突」は昭和36年（1961）に解体された。



33 旧堺紡績（昭和51年2月10日撮影）



34 旧堺紡績（昭和51年2月10日撮影）



35 旧堺紡績（昭和51年2月10日撮影）

**33・34・35 旧堺紡績（堺市堺区戎島町）**

堺最古のレンガ建築、旧堺紡績の工場の写真。明治3年(1870)に創業した堺紡績は、官営工場となったのち、明治11年に民間に払い下げられた。建設当初は見学人が多数訪れ、工場の錦絵も発行されるほどであった。

昭和8年(1933)に閉鎖され、牧村史陽が撮影した昭和51年当時には、取り壊した跡地に府営住宅を建設することが決定していた。現在は跡地に「堺紡績所跡」の案内看板が立つのみである。